

「わが図書館の本」
～大隅支部 垂水市立図書館～

垂水市の海潟地区に江ノ島という島があります。その島を舞台とした昔話を基につくられた紙芝居を紹介します。

桜島と垂水がまだつながっておらず、船で行き来をしていた頃のお話です。人さらいのふか九郎という男がおりました。娘をさらっては売り飛ばし、人々から恐れられていました。

月がおぼろにかかった、風一つない夜のことです。さらった娘たちを乗せたふか九郎の船が、国分の敷根から瀬戸海峡(当時の桜島と垂水の間の海峡)へと漕ぎ出しました。船が海峡に差し掛かった途端、霧が出はじめ、自分の鼻先さえ見えないほどでした。

ふか九郎が困っていると、霧の中から「もおし、もおし」と呼びかける声がします。振り向くと気品のある女が船のへさきに立っていました。深い霧の中でも不思議とその女の顔だけははっきりと見えました。

はたしてこの不思議な女の人は何者なのか…。そしてさらわれた娘たちは助かるのか…。

この紙芝居は図書館のおはなし会でも使われ、子どもたちにも親しまれています。



紙芝居 江の島弁天
作・画 足立 昇